

救急センターの現状

胆振西部医師会 副会長
元町内科クリニック 院長
森谷典久

胆振西部医師会では、地域住民の夜間休日診療を担う救急センターを運営しています。これは伊達市の委託を受け、当医師会が基幹病院の伊達赤十字病院（以下日赤）の協力を得て実施しています。私が内科診療所を開業したのが平成4年6月1日で、この制度は同年の7月1日に開始され、現在も継続されています。

それ以前については詳しくは分かりませんが、ほとんどの救急患者は日赤に搬送されていたようです。その後昭和54年10月から平成4年6月まで、市の郊外に伊達市立胆振西部夜間急病センターが設置され、週末の夜間のみ診療をしていました。休日の日中は、開業医による在宅当番医制度がありました。この頃から二次救急を必要とする重症患者や、病院受診を希望する患者が増え、日赤に搬送される例が多くなり、日赤の当直医の負担が大きくなりました。現在の救急センターの設立にあたっては、より効率的で日赤の当直医の負担を軽減させるシステムが模索されたと推測します。

伊達市の一次救急医療確保対策事業として発足し、当時はほかの5町村、現在は洞爺湖町、壮瞥町、豊浦町の協力の下に運営されています。救急医療啓発普及事業費は、各市町の人口に応じて処出され、一次救急医療確保対策事業費は、各市町の受診者数によって負担額が決定されます。この体制の特徴としては、日赤に併設して診療場所を確保し、日赤のカルテを使用し、検査は日赤の施設を利用し、診療報酬は日赤に収納されます。これにより患者の移動距離が短くなり、二次救急の必要な場合も、後方待機の日赤医師に円滑に引き継ぐことができるようになりました。平日の午後7時から10時まで主に開業医が担当し、土、日曜日、祝祭日、年末年始は午前9時から午後8時まで北海道大学の医局から派遣された医師が担当しています。当番医は定額の報酬を受け取ります。

当初は日赤の診療体制も充実していて、脳外科的処置を必要とする患者以外は、ほぼ院内で治療が完結していました。医師数も充足していたため、金曜日の夜間枠を日赤の当直医にお願いしていました。新医師臨床研修制度が開始されてからは、日赤の医師数が減少し、平成16年5月から金曜日も医師会当

番医が担当するようになりました。

開業医の当番はあくまで自由参加ですが、各科の多くの先生に参加していただき、初めの頃は年に10～11回の割当てだったように記憶しています。その後年齢上限を70歳と決めたり、辞退される先生が出たりして、当番を担当する先生が徐々に減ってきています。最近では2ヵ月に1回、月に2回担当する先生が増えてきました。北大から派遣される医師も今後長く継続される保証はありません。

日赤も診療科がどんどん縮小されたり閉鎖されたりして、夜間診療を引き受けられないケースが増えてきています。管内にはほかにも救急医療を行っている医療機関はあるのですが、中心になるのはやはり日赤です。地域の基幹病院の診療体制が改善されなければ、胆振西部医師会だけではなく室蘭市医師会も含めてこの地域の救急医療のあり方を見直す必要があります。医師会会員の諸先生のさらなるご協力をお願いします。

